民俗学

１２．ものがたるー口頭伝承３ー

菊地暁（folklore.lecture@gmail.com）

①「かたる」ということ

・伝統的言語観（「真か偽か true or false」）の限界:依頼、約束、宣誓など

・オースティンの言語行為論：「記述的 descriptive」のみならず「行為的 performative」

→現実（擬制）や現実を超えるもの（虚構）を想像／創造するコトバ

②口頭伝承 oral tradition（口承文芸 oral literature、言語芸術 verbal arts）の諸ジャンル

・基礎としての語彙・語法

	非韻律的	韻律的
短詞章	＜コトワザ＞（諺、謎、呪文）	＜ウタ＞（歌謡）
長詞章	＜ハナシ＞（世間話、昔話）	＜カタリ＞（語り物）

③神話：アーキタイプとしての

・神話：時間や場所を定め、特定の形式をもって語られる、信ずべき物語

→神話の「破片」としての語り物（形式）、伝説（信じること）、昔話（内容）

④昔話（←→伝説）by 柳田国男 1932『桃太郎の誕生』（定本 8、文庫 10、全集 6）

・形式性（「むかしむかし」～「どんとはれ」）

・固有の対象物はない

・話者は内容に責任を負わない

・内容の面白さ：その娯楽機能と教育機能

⑤昔話の近代／現在 by 滑川道夫 1981『桃太郎像の変容』東京書籍

・出版による普及／教育的活用／イデオロギー的活用／観光的活用／マルチメディア化／キャラクターの力

＊文献

柳田国男 1947『口承文芸史考』中央公論社（定本 6、文庫 8、全集 16）

内村剛介他 1982『露西亜学事始』日本エディタースクール出版部

鳥越信 1983『桃太郎の運命』NHK ブックス

立川健二・山田広昭 1990『現代言語論　ソシュール　フロイト　ヴィトゲンシュタイン』新曜社

重信幸彦 2003『＜お話＞と家庭の近代』久山社

大塚英志 2003『物語の体操　みるみる小説が書ける６つのレッスン』朝日文庫

兵藤裕己 2009『琵琶法師　＜異界＞を語る人々』岩波新書

大浦康介編 2017『日本の文学理論 アンソロジー』水声社

千野帽子 2017『人はなぜ物語を求めるのか』ちくまプリマ―ブックス

鳥越信 1983『桃太郎の運命』NHKブックス

おじいさん、おばあさんをはじめ、村人たちは総出で桃太郎を歓迎する。宝を床の間に飾ると、桃太郎は犬たちに向かってあいさつする。

「やあ、それでは皆さん、御苦労でございました。今度は又竜宮城に乙姫様を取りにゆくからその時もはたらいて下さい。そのときも間違ひなくきび団子を半分づつあげるから。」

宝の分け前にあずかれると思っていた犬たちは唖然とするが、考えてみるとキビ団子半分でやとわれた身としては、文句のつけようがない。仕方なく帰っていったあと、おじいさんは桃太郎にたずねる。

「桃太郎や、何故お前はみんなを帰してしまはないであれを家来にして、お前がその王様にならなかつたんだい？」

すると桃太郎は、

「私も一時さう思つたものでしたが、さうするには毎日きび団子がたくさん入用ですからね」

と答へました。

おばあさんは、この利口な桃太郎の言葉に感心しました。

↑坂埜光雄 1929「その後の桃太郎」

さて、それから数ヵ月後、桃太郎から犬・サル・キジ・クマバチなどに、伝言があった。明日、竜宮城へ乙姫を奪いにいく、今度はキビ団子を一つずつやるから来てくれ、というのである。みんなは犬の家に集まって相談した。

そして、みんなは宣言書を作って、桃太郎に送った。その後、桃太郎が竜宮城へ行ったという話を聞かないのは、たぶん、みんなが反対したからにちがいない。その「宣言」には、次のように書いてあったということである。

一、俺達は他国との争ひをやめる。

二、俺達の働きで得たものはみんな俺達のものだ。桃太郎のやうに俺達の働きで得たものをすつかりせしめてゐながら、きび団子で雇つたからなどといふ小理屈をいふ奴に絶対反対する。

三、好きでもないお姫様を無理に取る事など、これ又絶対反対だ。俺達はさうした戦ひの為に従軍しない。

桃太郎はこの返事を受け取ると、びつくりしてこの村を逃げ出したさうです。

ストライキのイメージ　題名が示しているように、この作品は桃太郎の後日譚であるから、鬼が島遠征の意味についてはふれられていない。つまり作者の理念は、桃太郎対鬼の関係にはなく、別のところにある。別のところとは、桃太郎対犬・サル・キジ――それにこの

桃太郎　うーむ、ひどくやられているなあ。話にはきいていたが、まさか、こんなにひどいとは思わなかったよ。まるで、一めんのやけ野原じゃないか。――よくもまあ、こんなにやられるまで、国民ががまんをしていたもんだなあ……

そういっているうちに、ひどい咳が出てくる。そこへ「日本一のかぜぐすり」と書いた旗をもった薬屋があらわれ、桃太郎は一〇〇円をはらって薬を一服買う。ところが唐がらしにフスマかヌカをまぜたようなひどい薬で、とても飲めたものではない。

次に「日本一のきびだんご」という旗をもった団子屋が出てくる。桃太郎は一〇〇円はらってキビ団子を一つ買うが、これもくさった団子でとても食べられたものではない。そこへ次々と、「日本一のチュウインガム」「日本一の小学目ぐすり」「日本一のあわぶくせっけん」等々、いずれも「日本一」を旗印にした者が通りかかる。

桃太郎はそれを見ながら、それまで持っていた自分の「日本一」の旗をそろそろと抜きとり、丸めて足もとに捨ててしまう。ちょうどそこへ犬、サル、キジが登場するが、あたり一面「日本一」の旗ばかりで、中々桃太郎が見つからない。ようやく人がまばらになって、桃太郎と犬たちは再会する。みんな口々に戦争はこりごりだと話しあい、桃太郎がなぜ「日本一」の旗を捨ててしまったのか、の話題になる。

↑奉剛三郎 1950「犬たちの桃太郎」

桃太郎　戦争でぼくは、刀と扇子もなくしてしまった。けれど、日本一の桃太郎という旗印だけは、だいじに持って帰った。

いぬ　それをまた、どうして？

桃太郎　いや、かえってみたら、日本一なんて、とんでもないうぬぼれさ。日本一というのに、ろくなものはありゃしない。ぼくだって、同じことさ。だから、ぼくはきょうから、日本一の桃太郎じゃない。ただの桃太郎だよ。

といって、竹竿を後方へすてる。みんな、しんとして桃太郎を見る。――間。

きじ　桃太郎さんは、これから、どうするんですか？

桃太郎　もちろん、ただの桃太郎になって、大いにはたらくよ。

さる　いぬくん、ぼくたちと同じだねえ。ぼくたち、はたらくものは、いつも、ただのさる、ただのいぬ、ただのきじだもの。

いぬ　ほんとだ。それでこそ、りっぱにはたらけるからね。

きじ　ただの桃太郎さん、ばんざいですね。

桃太郎、笑ってうなずき、立ちあがる。

――幕――

働く者の一員桃太郎　この劇の出だしの場面は、日本の敗戦によって武装解除され、日本に引き揚げてきた元兵士たち、あるいは軍国主義の侵略思想に踊らされ、外地へ出か